

○赤堀 方哉（神戸大学大学院）

山口 泰雄（神戸大学発達科学部）

1. 緒言

21世紀の幕開けを間近に迎え、わが国においては高齢化社会への対応が大きな課題となってきた。国連統計によれば、全人口における65歳以上の高齢者の占める割合が7%以上になるとその国は高齢化社会に入ったと言われる。また、14%を超えると高齢社会という。1994年において、わが国の高齢化率は14.0%にのぼり、2025年には高齢化率が約25%にもものぼることが予測されており、スウェーデンを抜いて世界一の超高齢社会に突入することが確実である¹⁾。特に深刻なのは医療費の問題である。1994年のわが国の国民医療費は26兆円で、国内総生産の約5%と推計されるが、2030年には27~43%にもものぼると予測されている。このような状況において、国民の健康づくりに対する関心が高まってきたのである。そして、年齢や性別にとらわれず、誰にでも参加できる生涯スポーツが普及してきたのである。その中でも、手軽に誰でも実施できるスポーツとしてのウォーキングに注目が集まっている。ウォーキングは身近であるというだけでなく、いつでもどこでも一人でもできるという点で継続しやすい身体活動といえる²⁾。

ウォーカーの増加に伴って、各地でウォーキングのイベントも開催され、多くのウォーカーを集めている。平成6年のウォーキングイベントの総参加者数は55万6千人であり、この10年間で10倍になったと言われている³⁾。このようなウォーキングイベントの隆盛を背景に、ウォーキングイベントに関する研究も盛んになってきている。山口ら(1992)の研究⁴⁾によると、リピーターは中高年の男性が多く、県外参加者ではリピーターが初参加者を上回っており、また、リピーター単独参加者が3分の1を占め、距離が長くなるほどリピーター比率は高まるとしている。神吉ら(1993)⁵⁾は、参加者は40歳代・50歳代が多く、中高年中心であり、市内参加者は短距離が多く、県外参加者は長距離が多い。また、参加形態は「単独で」「友人と」「家族で」がそれぞれ3分の1を占め、女性に「友人と」が多く、男性に「単独で」が多いとしている。ウォーカーの期待と満足に注目した土肥ら(1994)の研究⁶⁾では、県外参加者は健康や自然に対する期待も満足度も高く、中長距離参加者は自然に対する期待が高いなど、参加コースによって期待と満足が異なることを明らかにしている。さらし高峰ら(1995)⁷⁾はリピーターと初参加者は参加動機やイベント評価によって判別されるとしている。海老原ら(1997)の一連の研究では、参加者の年齢や参加形態、イベント評価などはイベントごとに差はあるものの、全体としては性別では男性が60%女性40%、参加形態では「一人で」が最も多いとしている。

これらの先行研究から、中高年男性が一人でウォーキングイベントに参加している状況が浮かび上がってくる。しかし、これまでの研究では質問紙を用いた量的な研究が主流を占めており、イベント参加者の全体としての像を明らかにしてきたものの、参加者一人一人の事情は等閑視されてきている。そこで、本研究では中高年男性が会社に没頭するあま

り、家庭や地域社会では居場所がないと言われるような社会的背景を考慮して、中高年男性の単独参加者が、なぜ1人でイベントに参加するのかを、イベント当日の配偶者との関係という視点から明らかにしていくことを目的としている。

2. 研究の方法

1997年11月8日9日に実施された「第8回加古川ツデーマーチ」の参加者のなかで、8日の15kmコースに参加している中高年男性の単独参加者20人を対象に数分のインタビューを実施した。15kmコースを選択した理由は、地元からの参加者が多く、日頃からのウォーキングの習慣がなくても、比較的気軽に参加できるからである。インタビューの内容は、「家族の参加の有無」、「その理由」、「過去の参加経験」、「今後の参加意欲」の4点である。

3. 結果及び考察

インタビュー調査を行い、表1に示したような結果を得た。調査対象者は全員が地元からの参加者であって、いわゆるベテランウォーカーではない。「配偶者がこの大会に参加しているか」という問いに対して、3人(⑥・⑭・⑱)が参加していると回答した。配偶者が参加していないと回答した17人に対しては、「配偶者はどうしているか」という質問を行った。その結果は8人(①・⑤・⑩・⑫・⑮・⑰・⑲・⑳)が家にいると答え、4人(④・⑦・⑪・⑯)は買い物に出かけた又は友人たちと出かけたとしている。1人(⑨)は仕事に出かけたとしている。残りの4人(②・③・⑧・⑬)はわからないもしくは普通の休日と同様としている。これらの結果から、配偶者に関してはツデーマーチというイベントの開催とは無関係な、日常的な休日を過ごしている様子が伺える。また、一緒に参加しない理由として、趣味の違いを挙げる人(②・④・⑦・⑯)も多くいた。以上のことから、中高年男性の単独参加者は、当日の配偶者との関係から3つのグループに分類されることがわかる。すなわち、「配偶者参加型」、「異趣味型」、「無関心型」である。

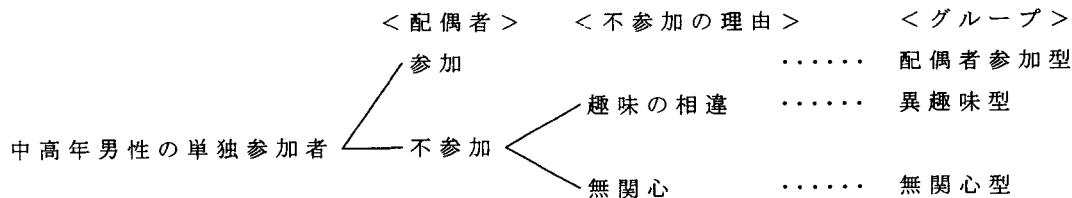


図1. 中高年男性単独参加者のグループ分類

配偶者参加型に含まれた3人には、「何故、一緒に参加しないのか」という質問をした。それに対しては歩くペースの相違を理由に挙げている。そのうち一人(⑥)は、待ち合わせの場所を決めて一緒に食事をする予定であった。また、「一緒に参加したいか」という質問に対しては、それが理想だが仕方がないとしている(⑱)。全員が過去の参加経験を持っており、再来志向も強いのがこのグループの特徴である。このグループは、夫婦ともにウォーキングという趣味を持ちつつ、互いを尊重し合っているようにも見えるが、たかが15

kmの距離を歩くのに、お互いのペースに固執することが必要なのかという疑問もある。コミュニケーションよりも自分のペースを優先させているのであり、日頃からのコミュニケーションの少なさが暗示されているように思われる。

次に異趣味型である。配偶者と参加しない理由として趣味の相違を挙げているグループであるが、互いの趣味に干渉し合わない個人主義的な風潮が感じられ、肯定的にも評価することが可能であろう。しかし、各地で開催されているウォーキングイベントに参加するスポーツツーリストのようなウォーカーと異なり、地元のウォーカーで年に1回の大きなイベントとして参加するツデーマーチの当日にも趣味の相違を主張することに意味があるのだろうか。また、ウォーキングを趣味であるとするならば、年に1回の大イベントの当日に趣味を共有できる友人は、彼らにはいないのであろうか。上述したような、家庭や地域社会での中高年男性の居場所のなさが伺えるようである。

最後に無関心型であるが、このグループは当日の配偶者の行動に関心を払わず、何をしているかよくわからないが、自分だけで参加したというグループである。自分が参加するにあたって配偶者に声をかけずに参加し、おそらく、配偶者にしても、当日の彼らの行動を知らないのではなかろうか。家庭内でのコミュニケーションの不足が見て取れる。また、このグループの特徴は他のグループと比べて、過去の参加経験も再来志向も弱い点があり、計画的に参加したと言うよりもむしろ、当日が近づいてきて急遽思い立って参加した話す者もあり、その日限りのウォーカーも多いであろう。

4. 結語及び研究の限界

本研究を通して次のような結果が明らかになった。男性単独参加者の傾向には次のようにまとめられる。

- 1) 配偶者が参加している男性の単独参加者は、配偶者と一緒に歩かない理由を歩くペースの違いに起因させている。
- 2) 男性単独参加者は、配偶者と共に参加したいと思っているものも多いが、趣味のちがいであきらめている者も多い。
- 3) 男性単独参加者の中には、当日の配偶者の行動に関心を払っていない者もいる。

中高年男性の単独参加者が、1人で参加している理由には、当初推察したとおり家庭や地域社会での居場所のなさが一つの理由となりうるということが明らかになった。これは、非常に悲観すべきことのようなのであるが、中高年男性の単独参加者は、15kmコースの参加者にはそれほど多くなく、大半は家族や友人と参加しているようであり、このウォーキングイベントの参加者を見る限りは、世間で言われているほど、中高年男性の居場所が家庭や地域にないということはなさそうである。先行研究で明らかにされている、中高年男性が1人で参加しているというのは長距離コースに多く、その大部分は「アル中」とも言われ、各地のウォーキングイベントを渡り歩いている人たちのようである。

主にインタビュー法を用いて研究を進めてきたが、ウォーキングイベントの当日にあった見知らぬ若輩者にどれだけ本心を語ってもらえたかは非常に疑問であり、本研究のよう

なインタビュー法の限界であろう。本心を引き出すためには、1回きりのインタビューではなく、継続的に行って調査者と被調査者との信頼関係を築くことが大切であろう。

表1. 中高年男性の単独参加者へのインタビューの結果

番号	配偶者	当日の配偶者の行動及び参加してほしいかどうか	参加経験	再来志向
①	×	家でゴロゴロしているだろう。	○	×
②	×	普通の日曜日。趣味が違うので仕方ない。	×	○
③	×	わからない。出来れば一緒に歩いてほしいが。	○	○
④	×	買い物に出かけていると思う。趣味が違うので仕方ない	×	○
⑤	×	家でゴロゴロしているのでは。	×	×
⑥	○	歩くペースが違うから。一緒に食事をする予定。	○	○
⑦	×	友人と出かけていると思う。趣味が違うので仕方ない。	○	○
⑧	×	わからない。普通の休日と一緒にでは。	×	○
⑨	×	仕事にいつている。	×	○
⑩	×	家にいると思う。	○	×
⑪	×	わからない。買い物にでも行っていると思う。	×	×
⑫	×	家で家事をしていると思う。	×	×
⑬	×	わからない。出来れば一緒に歩きたい。	○	○
⑭	○	歩くペースが違うから。配偶者は友人と。	○	○
⑮	×	家にいる。趣味が違うので仕方ない。	○	○
⑯	×	友人と出かけた。今年は日程が合わなかった。	○	○
⑰	×	家でゴロゴロしているのでは。	×	×
⑱	○	歩くペースが違うから。出来れば一緒に歩きたい。	○	○
⑲	×	家にいると思う。	×	×
⑳	×	家にいると思う。	○	×

5. 参考文献

- 1) 厚生省人口問題研究所：人口統計資料集、1994.
- 2) 江橋慎四郎編、『ウォーキング研究II』不昧堂出版、pp64-76、1996.
- 3) 谷口 勇一、松尾哲矢、大谷義博、「国際スポーツイベントの社会学的研究」、『九州体育・スポーツ学会第45回大会号』、p33、1996.
- 4) 山口泰、神吉賢一、天野郡寿、岡田明、「ウォーキングイベントの参加者研究(3)-リピーターの特性-」、『日本体育学会第43回大会号A』、p172、1992.
- 5) 神吉賢一、山口泰雄、天野郡寿、岡田明、「ウォーキングイベントの参加者研究(1)-ウォーカーの参加特性-」、『体育・スポーツ科学 2』、pp9-16、1993.
- 6) 土肥隆、山口泰雄、神吉賢一、天野郡寿、岡田明、「生涯スポーツイベントの社会学的研究(1)-ウォーカーの期待と満足-」、『体育・スポーツ科学 3』、pp33-44、1994.
- 7) 江橋慎四郎編、『ウォーキング研究II』不昧堂出版、pp77-84、1996.